❶ システムが必要だ

赤ちゃんは毎日の経験の中で言葉を学ぶ。うちの子どもの例で言うと、だいたい２歳くらいから喋りだし、会話が成立し始めたのが幼稚園に行き始めた頃で、それでも言い間違いはまだまだ多かった。たぶん小学校低学年の頃だって、日本語を日本語としてきちんと使う能力はなかったかもしれない。

となると、子どもがするように、経験の中で新しい言語を学ぶのには、かなり時間が掛かるということになる。それも子どもの柔らかな脳！　周り全てがネイティブスピーカーという環境の中であっても、である。

つまり僕のような大人が新しい言語を学ぶには、経験だけではダメだということだ。いや、大人に限ったことではない。もちろん子どもによって違いはあるが、小学校高学年以上であれば、経験だけに頼るのは危険だと思う。もっと効率の良い学習方法が必要になってくる。

そこで**ジャジャーン**と登場するのが、文法ってヤツだ。

経験だけではなかなか分からない言語のルールをコンパクトにまとめたもの、――それが文法で、これを知っていると知っていないとでは、“間違い”の量が大幅に違う。

母国語の場合は、子どもの時期に経験を長く積み重ねることで言葉の上でのルールを頭の奥底に構築していくんだけれど、外国語を、その国でない場所で習得しようとする場合はそうはいかない。もっと効率的に、意図的に、その言語のルールを前頭葉（頭の表面って感じ）に人工的に作っていくしかない。

台風先生との縁がきっかけになって日本語について考えるようになったんだけど、そうなって初めてネイティブスピーカー（母国語話者）はすごいと実感する。

僕たちは、相手によって言葉を使い分けている。そのときの状態で、語尾や言い方を少し変えて、その気分を表現している。文法的に考えると、すごく複雑なことを一瞬のうちにやってしまう。しかも文法の間違いは普通、犯さない。それはたぶん、言葉が僕たちの感情や考えにまで深く染みこんでいるからだと思う。

でも外国語となると、全てがいきなり怪しくなってしまう。

台風先生みたいにアメリカにずっと住んでいて、しかも英語を使って仕事をしている人でも、ネイティブスピーカーにはかなわないらしい。ネイティブとそうでない者は、その言葉を扱うことに関して根本的に違っているっていう。つまりその差は果てしなく大きいということだ。

僕たちが中学で英語を勉強したとき、動詞だとか名詞だとか、言葉の種類を教えてもらって、それがどんな風なルールで変化するのかを学習した。三人称単数現在形では動詞にｓがつきます、過去形にしたければ普通、ed をつけます、っていうのがそれで、覚えることばかりで、本当に大変だった。

でも、今になって思えば、そうやって文法をきちんと教えてもらって良かったと思う。あの頃、教えてもらったからこそ、今では僕のように普段、英語を喋らない人間にとってもそれらの文法が当たり前のこととして脳に納まっている。**分かっていることと、使えることは別だ**けど、少なくても**正しい言い方がどれかを判断する基準**を持っている。ネイティブスピーカーのように一瞬で判断することは無理だけど、ちょっと時間があれば自分なりに正しい答を出すことができると思っている。

つまり言語を学んでいくとき、文法を避けて通ることはできない。

いや、避けて通ってもいいけれど、そうしたら最後、かなりの回り道を覚悟しなければならない。

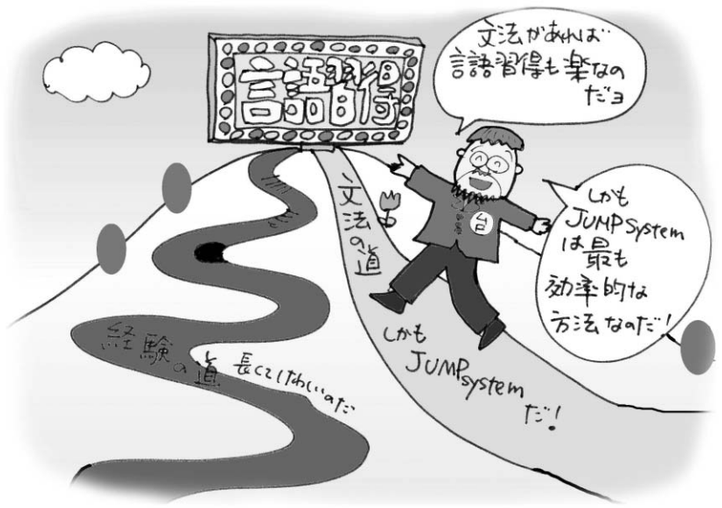
逆に文法をきっちりと自分の物にしてしまえば、ネイティブスピーカーにいちいち訊かなくても、自分なりに正しい答を出すことができる。つまりある意味、ネイティブスピーカーに近いことができるようになる可能性が出てくる。

だけど、その一方で文法の勉強は面白くないという現実がある。複雑だし、分かりにくいし、覚えなければならないことも多いからだ。だから学ぶべき文法は少ない方がいいに決まっている。

で、ここで台風先生の出番が来る。

台風先生は日本語文法を分析し、これまでバラバラだった一つ一つの文法を組み合わせ、**最小限のルールとしてまとめあげることに成功した。**さらに台風先生のやり方では、外国人学習者が最も効率よく学べるようにすることを第一に考え、それらのルールを教授法のシステムの中に位置づけているという。

学習者にとって負担が少なければ、当然、教員（教える側）の負担も少なくなる。

つまり学習者も教員も、台風先生の主張する文法システムが必要だと理解するのが正しいのだ。

- **新しい言語を効率的に学ぶためには、文法を避けて通るわけにはいかない。だが、学ぶべき文法は少ない方が良い。**
- **日本語を学ぶ上でもそれは同じ。**
- **台風先生が主張するシステムは、学習者が効率よく学べるように（教員が効率よく教えられるように）考えられている。**